

2010年7月14日(水)話し合いまとめ～次回の勉強会の準備？

「私が私であることに価値はあるのか」という問いに対しては、大抵の人が、「価値がある」と思って生きているはずだ。それは、対話をする人も拒む人も同じである。ただし、両者は、価値の根拠が異なるようである。対話を拒む人、つまり合意を拒む人が、なぜそうするのかといえば、感受性が、自らのかけがえのなさの基盤だと考えているからだ。ゆえに、「自分の感受性は特別である」と考え、合意は感受性のすり合わせに感じてしまう。しかも、社会的評価（相対的価値）に振り回されており、真理を信じきれず、対話を勝ち負けで考えてしまっている。結果、「合意された意見が勝利を収めた意見であり、否定された意見は負けた意見である」と考え、「『対話は勝ち負けでない』のなら、私の考えを否定するという私を負けさせる行為をなぜするのか」、という誤解をしてしまうのだ。しかし、触発されて起こる感受性は、与えられた条件（環境・経験など）により再現可能なものであるため、かけがえのなさの根拠ではなかった。むしろ、こうした「感受性がすべての原因である」という考えは、「すべては傾向性である」と言っている訳だから、「あらゆる価値は相対的で見せかけである」と考えていることになってしまう。常に物事を「何かのため」として捉えているので、対話をする人が「価値を信じずに生きていくことなどできないでしょう」と説明しても、「生きるために都合がいいように考えているだけだ」と、かたくなに絶対的価値を否定する。そう考えることはもちろんできるのだが、これでは、「そういう経験をしたから対話は理性の話だと思えるのだ」と、駄々をこねているようだ。「絶対的な価値・理性が確かにあると証明されたら、哲学をしようと思っているのに」と、ないものねだりをしている。しかし、絶対的価値や理性が「ないもの」というわけではないのだ。自分にとっての証明は可能だからである。科学的な、誰もが納得するような証明はできないが、宗教など自分自身を満足させるものが証明となりうるのかもしれない。

【未消化】

合意したら私の独自性は消えるのではないかという疑問。→合意は抽象的だから、その人個人のものは残る。言葉がそもそも抽象的なので、言葉に出来ないようなものがある。それが感受性だが、触発される感受性とは違う。「すべて傾向性なのだから、人間関係は、感受性があうかあわないかである」という考えに対し、普遍的に合意の可能性を信じる対話は、理性により感受性は変わり、新しいもの（理解の深まりなど）が生まれると考える。

「自分に価値があると思いたいから哲学する」という考えは、「だから何？」らしい。自分を、相対的な評価の対象としてではなく捉えているようだ。目的を考えることは自然な気がするが、「自分に価値があると思いたいから自由な意志決定を理解したい」は、「承認や個性がほしいから対話をする」と同じで、いつまでも相対性から抜け出せないのか。

※「なすべきこと」を比べているようで比較を絶する（絶対的）のが、義務に基づく意志。

※因果的原因と主観的な理由。現象界には理由が存在しない。「理由は単に嫌なだけだ」と思えるときも、「理屈を突き詰めず意志決定する」と理性が選択している。